

# 余分な存在として漂う

——A・S・バイアット『ナイチンゲール目瓶の中の魔神：  
五つの御伽話』を読む——

Floating Redundant: Reading A. S. Byatt's  
*The Djinn in the Nightingale's Eye: Five Fairy Stories*

船 水 直 子

## 要 旨

A・S・バイアットは『千夜一夜物語』についてのエッセイの中で、次々に語られる物語は無限の表徴であり、永遠に繋がる点で死んでも遺伝子が受け継がれていく人間と同じだと述べる。同じ頃に『ナイチンゲールの目瓶の中の魔神：五つの御伽話』は書かれた。『ガラスの棺』の仕立て屋は、お姫様と結婚し弟王子も含め三人で暮らすことで豊穡を手にする。『ゴドの話』では付け足しのように語られる鍛冶屋の娘の消息の中に豊穡がある。『長女のお姫様の物語』では王国にとっては余分な存在となった姫が、森の老婆との心豊かな暮らしを手に入れる。『竜の息』では巨大竜が村を壊滅させた話が代々伝えられ、村人に真の豊かさを教える。『ナイチンゲール目瓶の中の魔神』では女、妻、母の役割を終えた主人公が魔神と出会い永遠に繋がる豊かな物語を手に入れる。余分な存在として運命に任せ生きることで、永遠に繋がる豊穡の物語を手にすることができるというテーマがこの短編集を貫いている。

## キーワード

アラビアンナイト、物語の始めと終わり、死、魔神、余分な存在として漂う

## I

A・S・バイアット (A. S. Byatt) (1936-) の『ナイチンゲール目瓶の中の魔神：五つの御伽話』 (*The Djinn in the Nightingale's Eye: Five Fairy Stories*)

(1994) は『アラビアンナイト：千夜一夜物語』(*The Arabian Nights: Tales from a Thousand and One Nights*) に刺激を受け書かれた短編集で、物語と人間の生と死を描く。この短編集のうち『ガラスの棺』('The Glass Coffin') と『ゴドの話』('Gode's Story') は、ブッカー賞およびエア・リングス国際小説賞を受けた『抱擁』(*Possession : A Romance*) (1990) の中に作中人物が書いた作品としてそのまま挿入されている。リチャード・トッド (Richard Todd) は、置かれる場所が違うことで同じ物語が全く違う色合いを帯びることを詳細に分析した。(Todd 43-47)

この短編集においては表題ともなっている最後の物語が一番長いこともあり、これのみが取り上げられ、フェミニスト分析 (Jane Campbell など) や物語論からの分析 (Annegret Maack など) が多く行われ、短編集全体としてのテーマは等閑に付されてきたように思われる。そこで本稿では、これら五つの御伽話を貫くテーマは何なのかについて考える。

## II

バイアットはこの頃『アラビアンナイト』に興味を持っていたことが最後に付された謝辞からわかる。その中で彼女は、この御伽話集執筆中に出版された『アラビアンナイト必携』(*The Arabian Nights: A Companion*) の著者ロバート・アーウィン (Robert Irwin) と、彼女が『アラビアンナイト』に夢中になるきっかけを作ったピーター・カラッシオロ (Peter Carraciolo) に感謝の意を表している。(279)

また、バイアットは『アラビアンナイト』についての同じエッセイを三つの別の媒体に連続して掲載した。「語るか死ぬか：シェヘラザードはなぜ語り続けるのか」("Narrate or Die: Why Scheherazade Keeps on Talking") をまず1999年にニューヨークタイムズマガジン (*The New York Times Magazine*) に載せ、2000年に出版された『エッセイ選集：歴史と物語について』(*On*

*Histories and Stories: Selected Essays*)の中に「今までで一番偉大な物語」(The Greatest Story Ever Told)と改題して入れ、さらに2001年にはリチャード・F・バートン(Richard F. Burton)訳『アラビアンナイト：千夜一夜物語』(*The Arabian Nights: Tales from a Thousand and One Nights*)にイントロダクションとして転載した。後者二つには「最初ニューヨークタイムズに掲載された」との注が付されているが、同じエッセイを三度も別の媒体に掲載した事実は、バイアットの『アラビアンナイト』への傾倒ぶりとこのエッセイがかなり気に入っていたことを示す。以下、その内容を確認するが、三者を読み較べてみると全く同じというわけではなく何箇所か異同が見られるので、異なる部分についてのみ*The New York Times*版はTNYT、*On Histories and Stories*版はOHAS、Introduction版はIntro.と略して区別する。

バイアットはエッセイの中で、額縁物語である『アラビアンナイト』の額縁部分を紹介する。王妃の不貞を目撃して以来ひどい女性嫌悪に陥った王が、自分より不幸な男を見つける旅に出て、箱に閉じ込めた女に百回不貞を働かれても気づかない魔神に出会い、自分より不幸な男がいるとして国に帰るが、毎晩処女を娶り翌朝には処刑する行為を繰り返す。これをやめさせようと王のもとに自ら出向いたシェヘラザードは、毎晩物語を語り、続きを聞きたい王は彼女の延命を続け、千夜一夜分の物語とその間に息子が三人生まれた後に、二人は結婚してハッピーエンドを迎える。

『アラビアンナイト』は無限の表徴であり物語を語ることについての物語だとバイアットは言う。「端数のない1000に余分の1を加えることは、数学的無限——どんな数字にも常に1を加えることができる——を作り出す方法を示し、1001という円環状の鏡文字を作る。……『大きな魚が小さな魚を食べる』ような物語集は互いに飲み込み消化し変形する傾向を持ち、この容器と千夜一夜物語に含まれるイメージもまた、無限を象徴する。全ては増殖し、千夜一夜物語は、迷宮、蜘蛛の巣状織物、網細工、無

限の支流を持つ川，連続した箱の中の箱，底なし池，自ら無限に向きを変え，物語を語ることについての物語」(Intro xiii)，「物語を語ることは呼吸や血液の循環のように，人間の営みの大きな部分」(OHAS 166)，「物語は遺伝子のようなもの。私達の物語が終わった後，私達の一部は生き続ける。結婚の時ではなく，1001の物語を語り三人の子供を生んだ後に，永遠の幸せにシェヘラザードが入ったことにはとても心動かされる」(OHAS 166)とバイアットは述べる。さらに「生物的時間を生きる人間に，始め，中間，終わりがあるように，物語にも，始め，中間，終わりがある」(OHAS 166, Intro. xiv)として，物語と人間の人生を重ね合わせ，終わってもまた次が始まることで物語が永遠の生命を持つように，終わりのある人間の人生も遺伝子が受け継がれることによって永遠に繋がると彼女は言う。

人生は，牢獄の中で暮らすようなものだとパスカルはかつて言った。牢獄から仲間の囚人が毎日一人ずつ連れて行かれ処刑される。私達は皆，シェヘラザードのように，死刑宣告を受け，自分の人生を，始め，中間，終わりのある物語だと思う。一般に物語，特に『千夜一夜物語』は，際限なく新しい始まりを持つ終わりによって私達を慰める。(OHAS 166)

物語と人間の人生の間にアナロジーを認め，死すべき運命の人間にとって『千夜一夜物語』は慰めの物語だとするバイアットは，シェヘラザードとして無限を表徴する現代のアラビアンナイト『ナイチンゲールの目瓶の中の魔神：五つの御伽話』を大人の読者のために紡いだ。大人は，御伽話に典型的な結末「それからずっと幸せに暮らしました」の中の永遠の幸せは，慰めのための偽りだと知っている(OHAS 166)。しかし，物語は語り

続けられることで、そして死すべき運命の人間は遺伝子が受け継がれることによって、永遠に繋がるのだとバイアットは言う。この御伽話集の五つの物語は語り続けられる物語のうちの五つにすぎないことは言うまでもない。

### III

五つの御伽話は全て「昔々あるところに」(‘There was once’, ‘Once upon a time’)というお決まりの言葉で始まり、読者を非日常空間にいざなう。そして大人の読者に子供の頃のような柔軟な心を取り戻し、経験で深みを増した想像力を解き放つことを求める。バイアットと心理分析専門医のイグネス・ソドレ (Ignes Sodre) 共著の評論集の前書きに、二人の会話を聞きこれを編集したレベッカ・スウィフト (Rebecca Swift) は「本当に成功した小説は、基底の原型構造に私達がよく知っている御伽話の影響があるなどのいくつかの共通点を持つことが明らかとなった」(*Imagining Characters* xii) と書く。また、バイアットは、アンジェラ・カーター (Angela Carter) やサルマン・ラシュディ (Salman Rushdie) が小説よりも御伽話の方から大きなエネルギーを得ると言ったことに触れ、自身も御伽話に大きな興味を持つ (*OHAS* 124) とし、「『私は御伽話を読んで大人になった——それらは現実主義の物語より私にとってはずっと重要だ』とアンジェラ・カーターが言うのを聞くまで、そのことを意識することがなかったので彼女には大きな恩がある」(Byatt, *Guardian* 2009 Apr) と述べる。

この御伽話集では、始まりは同じでも終わりは変化に富む。しかし、ある意味全てハッピーエンディングだと考えられ、物語を順に読むと一つのテーマが物語集を貫いていることに気づく。それは、余分な存在が運命に任せて生きる時、永遠に繋がる豊かな世界に至ることができるというものだ。以下では、まず初めの四つの物語を取り上げたい。

1. 『ガラスの棺』では、仕立て屋がガラスの棺に眠るお姫様を悪い魔術師から救い出し、お姫様と結婚して「彼らはそれからずっと幸せに暮らしました」(24)<sup>1)</sup>めでたしめでたしとなるが、お姫様は愛する彼女の双子の王子も含め三人で暮らすことを望み、昼間彼女は毎日王子と一緒に森に行って狩りを楽しみ、仕立て屋はその間ひとり城に残って、かつては生計のためにした仕立てを楽しみのためにするのでしたと物語は締めくくられる。

城で一緒に暮らす三人のうち余分な存在は、一見お姫様と仕立て屋という夫婦と一緒に暮らす王子に見えるが、実は仕立て屋だ。お姫様は、双子の王子を心から愛し、二人とも結婚せずに城ですっと一緒に暮らし一日中遊んだり狩りをして過ごそうと誓い合った仲であったことをはっきりと仕立て屋に述べている(16)。双子のお姫様と王子は互いのアニマ・アニムス(河合 183-218)だとも考えられる。一方仕立て屋は、御伽話の作法通りにキスをしてガラスの棺に眠るお姫様を目覚めさせた時、彼女が「この暗い場所から私を救い出してくれたら、ずっと暮らしていくのに十分以上のものをあなたに差し上げます」(16)と言った通り、お姫様との結婚で生活のために働く必要がなくなり、ふんだんに好きな布を取り寄せ思うがままに作品を次々に作り出して毎日を過ごす自由を手に入れる。仕立て屋の第一の喜びはお姫様と一緒に過ごすことではなく、仕立てをすることなのだ。仕立て屋がまず第一に職人であることは何度も強調されている(3, 4, 7, 13, 15, 24)。彼が毎日作る布の作品は際限なく増殖を続け、永遠の命や豊穡のイメージを仕立て屋に付与する。余分な存在の彼に豊穡の表徴が与えられている。

職人は自分の仕事をしなければ無に等しいのです。そこで彼は最良の絹の布と輝く糸を持って来るように[家来に]命じ、かつては厳しい生活のために必要に迫られて仕立てたものを喜びのためだけに作るの

でした。(24)

また、仕立て屋は、森の不思議な老人に、無限にお金が出る財布、無限に食べ物が出る鍋、美しいガラスの鍵の三つの中から一つ選ぶように言われた時、その複雑な細工の美しさに職人として惹かれ、また何に使うのかわからないゆえに未知の冒険にいざなうに違いないガラスの鍵を選んだ。職人魂と冒険心からガラスの鍵を選んだ仕立て屋に森の老人は、これから西風が来てお前をあるところに運ぶだろうが、決して逆らったりしてはならぬ、なすがままに身をまかせるようにと忠告し、彼はそれに従う。

彼は空気の枕に顔をのせ、叫んだりもがいたりしませんでした。すると細かな雨と煌めく太陽の輝き、流れる雲と吹き寄せられた星の光で満たされた西風の溜め息のような歌が網のように彼を包み込んだのでした。(10)

運命をそのまま静かに受け止める時、輝きに満ちた不思議な世界が優しく体を包み、心は安堵と喜びに満たされる。仕立て屋は運命とも言える西風に運ばれた場所から穴の中の迷路に入り、地下のガラスの棺の中で眠っているお姫様を救い出し、彼女と結婚する。このように彼は運命に逆らわず身をまかせ豊穡を手に入れたが、その豊穡は、最後に一緒に暮らすことになった三人の中で、彼が余分な存在であることで保証されるものなのだ。

2. 『ゴドの話』は、ダンスの得意な水夫と高慢な粉屋の娘が意地を張り合ったあげくに、ともに死に取り憑かれ死んでしまう話だが、物語の最後を締めくくり強い印象を与えるのは、粉屋の娘にふられたダンスの得意な水夫と結婚したものの全く夫から顧みられず、彼の死後に肉屋と再婚し

子供を六人産んで幸せになった鍛冶屋の娘ジーンの消息だ。

そしてジーンは肉屋と結婚し四人の息子と二人の娘を産み、みんな活発でしたがダンスだけは嫌いでした。(38)

死に取り憑かれた水夫と粉屋の娘の物語の最後に、付け足しのように添えられた鍛冶屋の娘の消息は、死をめぐる物語にとっては余分だが、元気な子供を六人産んだ彼女に豊穡のイメージが与えられて物語は終わる。そして水夫も粉屋の娘も名前が出てこない一方で、鍛冶屋の娘だけジーンと名前が出てくることは注目に値する。彼女は単なる付け足しの人物ではなく彼女こそが語られるべき人物なのだ。産んだ子供の数がマジックナンバー 3<sup>2)</sup>の倍数であることにも目を向けたい。シェヘラザードも子供を三人産んでハッピーエンドを迎えたことが思い出されてよい。高慢な粉屋の娘とは対照的に、平凡だが心身ともに健康な鍛冶屋の娘は、運命に任せ結局は幸せを手に入れ、彼女の遺伝子は代々受け継がれ永遠に繋がっていく。

3. 『長女のお姫様の物語』(‘The Story of the Eldest Princess’) は、長女のお姫様が王国の空の色が緑になってしまったのを青に戻すというミッションの旅に出て、使命を果たすことなく道中で出会った怪我をしたサソリ、ヒキガエル、ゴキブリのために森の奥深くに分け入り、物語によって傷を癒す老婆の住む世界に辿り着く物語だ。本国では、行方知れずの彼女に代わり、次女のお姫様がミッションを果たし女王になる。

森の老婆は長女のお姫様に言う。

あなたはゴキブリの話に耳を傾け、道を逸れてここに来ました。ここでは私達は物語を集め、物語を紡ぎ、治せるものは治し、治せないも

のは研究し、世界を変えようと奮闘することはせずに静かに暮らしているのです。(66)

世界を変えようとせず、ありのままを受け入れ、物語を紡ぐ世界。「私はここで今のあなたと一緒にいて幸せです」(72)と森の老婆に言う長女のお姫様は、王国にとって余分な存在となったからこそ心豊かな世界を手に入れた。緑の空をそのままで美しいと感じ物語を紡ぎ傷を癒す世界は豊かさに満ちている。森はお姫様の深層心理の世界でもある。森の中の道中で時折目にした自分の前後にいた女性達や森の老婆の延長線上に自分も存在することに気づき、永遠の連なりを感じる。運命に逆らわずこれを受け入れ、余分な存在となることで至ることのできる豊穰の世界がこの物語には示されている。

4. 『竜の息』(‘Dragons’ Breath’)は、ある日突然山頂から悪臭を放つ巨大竜が火を吹きながら下りて来て、村を壊滅させ、生き残った人々がそれまでは退屈だと思っていた昔ながらの平凡な村の暮らしのすばらしさを改めて知る物語だ。物語は次のように締めくくられる。

そしてこれらの物語は、自分がなぜ生き残ったのかと不思議に思う人々によって作られましたが、やがて彼らの子供達や孫達のための退屈に対する魔除けのお守り、平和と美しさと恐怖の間の本当の関係についての謎を解くヒントとなったのでした。(92)

豊穰は村の平凡な暮らしの中にこそあり、昔ながらの村の暮らしを守ることの大切さを教えるために、村にとって迷惑で余計な存在の竜の物語が残されたことは重要だ。しかも、この地方には大昔に竜が村に下りてきた

物語がすでにあった。

イギリスでは丘の周りを丸く囲む窪みは、大昔に竜がとぐろを巻いた跡だと言われている、この地方には太古の昔に巨大竜が山頂から下りてきて溝が刻まれたという物語がありました。夜になると暖炉のそばで親達は、炎や火を吐きながら竜が下りてくる話をして子供らを怖がらせて楽しむのでした。(75-76)

風化した昔話は、新たな物語として更新されなければならないことは興味深い。

このように四つの物語で描かれた、余分な存在の力によって真の豊穡に至ることができるというテーマは、一番長い五つ目の物語でも繰り返される。以下の章ではこの物語を詳しく取り上げる。

#### IV

『ナイチンゲール目瓶の中の魔神』(‘The Djinn in the Nightingale’s Eye’)の主人公である物語論研究者のジリアンは、死への恐怖をたびたび感じる。自分が必ず死ぬ存在だということを意識すると、不安で体が硬直し動けなくなってしまう。

「今、以前よりずっと生きているという感じがする。しかし、最近、私の運命——死——が待っていて、すぐそこに存在することを私に思い出させるため、時々姿を現わす。闘いではない。闘ってそれを消そうというのではない。それはほんの少しの間主導権を握り、また行ってしまい、いなくなる。私が生きていると実感すればするほど、それは突然現れる」(167-168)と彼女は親しい学者オーハンに話す。

死の影が目の前に現れ、ジリアンが硬直する場面は三回ある。

一回目は、トルコのアンカラで「女性の人生の物語」というテーマの学会でジリアンが、聴衆を前に講演している最中だ。彼女は、チョーサーの『カンタベリー物語』の中でも自分自身も含め多くの人が嫌う「忍耐強いグリゼルダ」について講演する。それは、学僧によって語られるどんなことにも耐え忍ぶグリゼルダという女性の物語だ。ジリアンはまずあらすじを紹介する。

跡継ぎが必要、落ち着いてもらいたいなど臣下に説得される形でしぶしぶ結婚を承諾したワルテル侯爵は、それと引き換えに彼のすること全てに口出ししないことを臣下に誓わせ、結婚式の行列の途中で花嫁として「美しく貞淑な」(109) 貧しい百姓の娘グリゼルダを選んで妃とし、彼女にも全て彼に従うことを約束させる。そして、彼女が娘と息子を産むと、侯爵は彼女の誠実さを試すため、母親が卑しい身分の出であることを理由に子供達を殺すことを命じ彼女はそれに従う。月日は流れ、密かに別の場所で育てられた娘と息子は、結婚できる年齢となる。侯爵は再び妻グリゼルダを試すため、全てを置いて裸で彼のもとを去るよう、そしてその前に、再婚する侯爵の婚礼を召使いとして手伝うよう命じ、彼女は従う。結局、再婚相手とその従者はグリゼルダの娘と息子で、全てはグリゼルダの誠実さを試すための嘘であったことが明かされ、グリゼルダはもとの妻の地位に戻されめでたしめでたしとなる。ジリアンは講演の中で、この物語に関連してシェイクスピアの『冬物語』に言及し、『冬物語』では、美しい娘パーディタは母親ハーマイオニの生き返りだと考えられ、女神ベルセポネの再生が、母である女神デメーテルの怒りのために荒廃した野に春をもたらすのに重なると述べる。そこで、ジリアンの声は震えだすのだ。彼女は聴衆を見渡しながら、ハーマイオニの友人であり召使いであるポーリナが、どんな風にして魔女や芸術家、物語を語る者の力を帯び、失われた女

王に命を再びもたらしたかを話す。

個人的には、私は決して我慢——耐え忍ぶこと——はできない、それは春のベルセポネの復活とは違うからだ。というのも人間は死んだ後、草や麦のようにまた生えてくることはない。人間は一度きりの人生を生き、年をとる。ハーマイオニから——そしてすでにあなたがたも知っているように忍耐強いグリゼルダから——人生のほとんどの部分は、プロットによって奪い去られ、無理やり活動できない灰色の虚空とされたのだ。息子やとりわけ娘が成長している間グリゼルダは何をしたのか？ 物語は大急ぎで語られ、女性の人生は結婚から出産、無へとあつという間に駆け抜ける。チョーサーは産まれた子供らについて続けて何らヒントを与えない。グリゼルダが愛、忍耐、服従において誠実であり続けたとチョーサーは主張するが、彼女の夫は、ポーライナの語り演出し支配したいという欲求を過剰に持っていたのだ。(113-114)

グリゼルダは夫の命令に全て従うが、夫に裸で出て行くように言われた時、チョーサーは次のような強い言葉を彼女に言わせていることをジリアンは指摘する。

裸で父のところから来たので、裸で戻りましょう。しかし古い服を全て取り去られてしまったので、裸を隠すためのスモックを下さい。私が歩く時あなた様の子供達がいた子宮が人々に丸見えにならぬように。虫のように私に道を歩かせないで下さい。私が持って来て持ち帰ることのできない処女膜のかわりに私にスモックを下さい。(115)

それを聞いたワルテル侯爵は、彼女にシフトドレスを着ることを許し、後に全ては彼女の誠実さを試すため仕組んだことだと明かし和解となるが、ジリアンは「何をグリゼルダはしたのか？」と聴衆に問いかけた後、先を続けられない。

ステージの上で、話そうと口をあけ、手を前に差し出したまま、目には煌めく光をやどしたまま。彼女はガラスのような目で見つめ、自分の声小さくなるのを耳にした。彼女はずっと昔にいた——彼女は塩の柱であり、彼女の声はガラス箱の中で響き、冬の途方にくれたキリギリスのような泣き声だった。彼女は指も唇も動かさなかった。(117-118)

後ろを見てはいけないと言われたのに振り返ってしまったため塩の柱と化した口の妻（創世記19：26）のように、ジリアンは自分の人生をここで振り返ってしまった、もしくは彼女の過去が突然フラッシュバックしたために、彼女は塩の柱のように体が麻痺したのだ。グリゼルダのように内なるエネルギーを押さえつけられ虚しく過ぎ去った自分の人生への戦慄が目に見える死の影となって、彼女は恐怖で動けない。

無の空間にベールを被った頭をうなだれ、長く筋っばい元気のない腕を……だらりと下げ……風の吹きすさぶ空白にドレープのある修道士のような服を翻らせる洞穴に似た巨大な女の姿を見た。……ぞっとしながら、彼女の目はそれぞれの皺を見分け、膨れた目の赤い縁を認め、歯のない陰気な口の引き伸ばされた唇の割れ目を見、たくさんの色でありながら全ては灰色なのを目にした。その女は、胸が平らで、しなびた肌は虚空にさらされ、腹や子宮であったところは風の吹き抜ける穴だった。(118)

女の姿が巨大なのはジリアンの意識の中で大きな部分を占めていることを示し、洞穴のような姿はジリアンの虚しさを反映する。オーハンの助けで我にかえった彼女は「グリゼルダは何をしたのか？」と再び問いかけて話を続ける。

侯爵から種明かしを聞いたグリゼルダは最初当惑し、理解できず、気絶する。そして気がつくと彼女は子供達の命を助けてくれていたことで夫に感謝し、子供達に彼女の父親は彼らを可愛がっていたと話し、——グリゼルダは息子と娘を強く強く抱きしめ、彼らと一緒に再び恐ろしい無意識に陥るまでさらにきつく抱きしめ、近くにいた人達は彼女から子供達を引き離すことができないほどだった。チョーサーも、オックスフォードの学僧もそうは言っていないが、彼女は子供達を絞め殺そうとしていたのだ。学僧の言葉には恐れが見られる。彼女の抱きしめる力の中に含まれる彼女の堰き止められ妨げられたエネルギーが、三人の意識を失わせ、彼らの主人、支配者によってもたらされるすばらしいフィナーレを知らせず、そこに参加させないようにした。しかし、彼女は正気を取り戻すと、古い衣服を脱ぎ、金の衣装を身につけ宝石の冠をかぶって、祝宴での彼女の居場所を再び手に入れ初めからやりなおすのだった。(119-120)

そして、ジリアンはこの物語を語り終えると、忍耐強いグリゼルダにおいてとりわけ恐ろしいのは、近親相姦や年をとることに対する心理的恐怖にあるのではなく、物語の語りとそれとのワルテルの関係にあるのだと次のように解説する。

この物語が恐ろしいのはワルテルが物語の中であまりにも多くのポジ

ションを引き受けていることだ。つまり、彼はヒーロー、悪漢、運命、神そして語り手だ。—この物語にはドラマがない、彼の背後で学僧もチャーサーも人々の矛盾する感情を報告することや、グリゼルダの息子の幸せな結婚についての歪んだコメントを述べることで物語の調子に変化をつけようとしているけれども。そして、この物語の教訓は、謙虚さにおいてグリゼルダを見習うべきだということではない、というのも、それは望もうとも、不可能、手に入れることができないものだからだと注釈者は続けて言う。オックスフォードの学僧は、ペトラルカによるこの物語の教訓は、ヨブのように人間は何が起ころうとも忍耐強く従わなければならないというものだと言っている。しかし、私達の反応は、間違いなく激しい怒りだ。—グリゼルダに対してなされたことへの—彼女から取り去られた、彼女の人生の最良の部分、取り戻すことのできないものへの—堰き止められたエネルギーへの。というのもフィクションにおける女性の人生についての物語は堰き止められたエネルギーの物語だからだ。—ファニー・プライス、ルーシー・スノー、グエドレン・ハーレスでさえ、全てグリゼルダの物語であり、皆を絞め殺そうとし、意志を持って忘却する瞬間を持つのだ。(120-121)

ジリアンがこのように話し終え、顔を上げると、あの生き物、悪鬼は消えていた。(121-122) 女性の堰き止められたエネルギーについて口にした瞬間、幻は姿を消した。幻は死の影であると同時に、抑圧されたエネルギーの怒りに満ちた無残な残骸「グリゼルダという悪鬼」(147) だったのだ。ジリアンは幻について、オーハンに話すことができなかった。「話すことのできないものは、血管の中、脳細胞の中、神経の中で力強く生き続ける。階段の灰色の男たち、トイレの山姥についてもしも話すことができた

なら、それらが消えることを子供の時、彼女は知っていたが、話すことはできなかった。彼女はそれらをうっとりとして想像し、恐怖の中でそれらを時々見たが、「今見る死の影は」それとは違っていた」(122)。「もしも話すことができたなら、それらが消える」とあるが、頭の中で整理され納得のいく解釈ができて初めて話すことができる。話せるとは自分なりの理解がとにもかくにもできたということだ。その問題から解放されると像は消える。ジリアンは想像したくないのに考えたくないのに、人生は虚しく過ぎ去りそして死ぬのだということが頭から離れない。それはどう考えたらいいかかわからないからだ。意識に上るたびに襲われる恐怖から、ジリアンは『冬物語』のハーマイオニの石の彫像のように、ロトの妻の塩の柱のように、体が硬直してしまう。

二回目にジリアンが死の影を見たのは、学会が終わった後にオーハンと一緒に訪れたエフェソス劇場の中心でだった。ジリアンは忍耐強いグリゼルダの幻とともに、自分自身の人生が奇妙にも停止するのを再び経験する(167)。

三回目に死の影、運命ともいべきもの(173)に出会ったのは、ハグヒア・ソフィアでだった。そこには穴の空いた奇妙な柱があり、その穴の内部に手を触れて三回まわすよう、そこに居合わせたパキスタン人家族の旅行者のうちの母親と娘二人にしつこく促される。そのジメジメした穴に無理やり手を突っ込まされた時、ジリアンは例の死の幻を見る。ハグヒア・ソフィアの穴の空いた奇妙な柱は、学会での講演中に見た腹や子宮が空洞の女の幻に似る。それは人生の大切な部分をほとんど奪われ空っぽの存在になってしまったグリゼルダの姿でもある。

ジリアンにとっての死は、人生の最良の時期を奪われ、皆を絞め殺したいほどの激しい怒りを覚えながらも、全てを意志の力で忘れる「忍耐強いグリゼルダ」のイメージだ。ジリアンがグリゼルダについて講演すること

にしたのは、彼女の物語が棘のように心に刺さり、何とか解釈をつけたかったからに他ならない。

生きていると感じれば感じるほど、死の影が突然姿を現わすとジリアンは言った (167-168)。翻ってそれは、死が必ず訪れることを自覚すればするほど、一度きりの生が愛おしく大切なものになり、今生きている奇跡に対し自覚的になることを示す。生は死を意識させ、死は生を意識させる。意識は双方向に揺れ動く。

死すべき運命にある人間が死への恐怖を感じるのは宿命とも言えるが、ジリアンの場合は目に見える幻となって彼女を襲う。この恐怖や不安とどのように折り合いをつけたらいいのか死をどう考えたらいいのか混乱する中、何とか納得のいく解答を求めて彼女はもがく。そして、もがくのではなく受け入れるのだと気づいた時、魔神が現れる。

## V

ジリアンは、ホテルでシャワーを浴び裸のままバスルームの鏡の方に歩いて行った時、湯気に曇る鏡の中にぼんやりと、死の影が彼女の方に近づいてくるのを見た。髪は黒く濡れて流れ、眼孔は黒く汚れて、縮む恐怖で液化したような顔、そして開いた口 (189)。しかし、よく見るとそれは鏡に映る自分の姿だった。死の影と鏡に映る裸の自身の姿がびったり重なり、ありのままの裸の姿を直視し受け入れざるを得なかった時、魔神が現れることは注目に値する。裸の姿は研究者の彼女が物語論という学問の鎧を脱いだ姿でもある。今まで蓄積した知識を捨て、子供の頃のように自分の感性のみで世界に対峙する時、大人になっても想像力が解き放たれ魔神に会える。様々な経験を経た大人が会える魔神は子供が会える魔神とは比べ物にならないほど複雑な存在であるのは言うまでもない。「この物語を書き始めた時、魔神自身は、活力としての死と物語を読むことへの情熱の

両方の表徴だと考えていた。子供は自分は永遠に生きて死なないかのように物語を読む。大人は自分には寿命があり物語はそれよりも長生きすることを知っていて物語を読む。魔神は、物語がそうであるように、永遠の命を持つ」(OHAS 132) とバイアットは言う。死すべき自分の運命を知っていて永遠の命を持つ物語を読む大人は、永遠の命を持つ魔神に出会えたらどんなに幸せだろうと夢想する。そしてジリアンは会えたのだ。

鏡に映る姿に悄然としてタオルを頭と体に巻いたジリアンは、バザールで買った埃だらけのナイチンゲールの目と呼ばれる瓶を思い出し、これに蛇口から勢いよくお湯をかけると美しい不透明な白い縞模様のついたコバルトブルーの瓶が現れ、固く閉まった栓をこじ開けると煙が湧き出し魔神が出てきた。偶然、封じ込められていた魔神を解放したことから、御伽話の定石通り魔神はお礼として彼女に三つの願いを叶えてくれると言う。その際、魔神は死すべき運命だけは決して変えられないと何度も念を押すが、これは重要だ。「永遠の命を願うことはできない、私が死なない存在であるというのと同様に、死すべき存在というのが人間の性質だから」(196)。「私はあなたの死すべき運命を遅らせることはできない」(201)。「私達魔神は火から作られ衰えることはない。あなた達人間は塵から作られ塵に戻る」(201)。「シバの女王はあなたのように死すべき存在だった」(209)。僕の愛した「ゼフィールは死すべき運命の人間だった。……僕達の子供は火と塵からできている」ので人間と同じ死すべき運命にあった(227)。このように、火から作られた魔神は永遠の命を持つが、塵から作られた人間は必ず死ぬと繰り返し言われるうちに、ジリアンは、自分は人間だから必ず死ぬということを当然なこととして受け入れるようになる。

慎重に考えぬいたジリアンの三つの願いは、彼女の心身を満たすもの——今までで一番自分が好きだった時の肉体と、魔神からの愛と、魔神への愛だった。彼女は、一番好きだった三十五歳の肉体(202)を手に入れ

ると「自由で幸せな人生を生きている」「気分がずっとよく、自分ももっと好き」(203)と感じ満足する。逆を言えばそれまで彼女は不自由で不幸な人生を生き気分が悪く自分が嫌いだったということだ。老いゆく体とともに自己肯定感が減り、しかも夫も子供もいなくなった寂しさは否めない。そこで彼女は魔神に二つ目の願いとして愛してほしいと言う。すでにジリアンを愛し始めているという「強烈な男臭さを放つ魔神」(193)は彼女の願い通りめくるめく愛を与えてくれる。そして、三つ目の願いとして、彼女は魔神に対する彼女の究極の愛、魔神の願いを叶えることを願う。

三つ目の願いは魔神と一緒にいったトロント大学での講演後、泊まったホテルで決めた。彼女は講演の中で「御伽話の中の登場人物は運命の支配下にあってその運命を演じる」(258)が「御伽話の中で登場人物が願いを聞き届けられる時に私達を感じる感情は奇妙なものだ。私達は自由に飛躍する可能性——欲しいものが手に入る可能性——と、願いが叶っても何も変わらない、なぜなら運命は決まっているからという確信を持ち続ける」(259)と前置きした上で、トルコに伝わる貧しい漁師の物語を取り上げる。彼は湖から引き上げた願いを叶える三匹の猿のおかげで豊かな暮らしを手に入れるが、それと引き換えに猿は徐々に衰弱し、猿の望むことを最後に願うと猿は消え、漁師は人間の一般的な人生、つまり病気になり死を迎えるという運命を辿った。この話からジリアンは次のように結論づける。

御伽話の中では、……叶えられた望みは、美しい静止状態に導く傾向がある。……結局、それからずっと幸せに暮らしましたという偽りの永遠という静止に至る。……この猿の物語は、全ての人生の目的についてのジークムント・フロイトの意見に関係があると私は思う。フロイトは何よりも、ずっと幸せに暮らしたいという私達の願い、欲求についての偉大な研究者だった。彼は夢という物語の中での私達の望

み、その成就について研究した。……フロイトは「全ての生き物の目的は死だ」と言い、彼の創造の物語を語る。そこでは創造物は命を吹き込まれる前の状態に戻ろうとし、皮が縮み猿が小さくなっていくのは命の力の恐ろしい付随物ではなくその秘された欲求なのだ (266-268)。

講演をした夜、ジリアンがホテルの寝室で魔神に「あのペーパーは運命と死と欲求についてのものだったけれど、あなたが望みを叶える猿の自由について教えてくれた」と言うと、魔神は「エントロピーの法則が僕達全てを支配する。それが魔法に由来するものであろうと、神経と筋肉によって作られたものであろうと、力は衰えていく」(269)と答える。これ聞いて、ジリアンは三つ目の魔神への願い——魔神の願いを叶えること——を決めたのだ。

ジリアンの願いに感謝した魔神はその夜彼女を愛し、彼女が彼を忘れないように「元素のダンス」という名の様々な色と形の粒の入った美しいガラスのペーパーウェイトを彼女に手渡し「今はさよなら」と言って姿を消した (272-273)。魔神の願いは自分の炎の世界に帰ることだったが、彼は彼女への愛の証として彼女のもとに時々戻って来る。魔神が彼女の三つの願いを叶えて去る時も、ニューヨークで再会後に去る時も、ジリアンが明るく「私の生きているうちに」思い出したら帰って来てねと言う (270, 277) のは彼女が人間の死すべき運命を受け入れた証拠だ。

魔神がいなくなってから、後に彼女は不思議に思う。「ホテルの部屋に東洋の魔神が優雅にくつろいで存在したことにどうしてあんなに冷静でいられたのだろう。……あの時、彼の存在と言葉を確かに受け入れていた、もしも夢の中で彼に会ったならそうしたように」(206)、そして「人間は夢の中で起こった現実ではないことを語る必要があり、記憶も夢と共通の

ところがある；記憶は、整理し直し、明瞭で単純な物語を作り、思い出すと同時に確かに創作する。ホプスは……想像は薄れた記憶だと言った。私は魔神の存在から『目覚めて』彼がもともと存在しなかったかのように去ったのに気づいたのだとは全く思わない、そうではなくて私が——もしくは彼が——互いの存在を共有しない世界に突然移動したのだと感じた」(206-207)とジリアンは言う。ジリアンにとって魔神は目の前の現実として確かに存在し、そして別の世界に去った。また現れるかもしれないという希望を残して。

魔神はジリアンの心の中の願望が実体化して見えたものだ。感受性の強い子供だった彼女には本で読んだものがありありと見えたという。子供の頃彼女は狼や熊や灰色小人を実際に見た。(100)初めてミルトンの『失樂園』を読んだ時には蛇が見えた。

ジリアン・ベホールトは見たのだ、輝き揺れるのを。それはイヴが楽園の庭で見た蛇でもなく、まして盲目のジョン・ミルトンの頭蓋骨の暗い空洞に現れた蛇でもなく、一匹の蛇、その蛇、ある意味、言葉でできている目に見えるまさにその蛇だった。(100)

「言葉が初めてとぐろを巻いて形となり、美しくページから立ち現れた」(99)のを彼女はよく覚えているという。ミルトンの蛇が見えた彼女には魔神も見えたのだ。

魔神は、ミルトンの『失樂園』を読んだ時に言葉から立ち現れた蛇のように、ジリアンが例えば『アラビアンナイト』を読んだ時に、そこに書かれた言葉から立ち現れた。恋人のように互いの経験を親しく語り合う時、彼は『アラビアンナイト』さながらの心踊る彼の愛と冒険の物語をいくつも話して聞かせ彼女を楽しませてくれた。魔神は『アラビアンナイト』の

物語そのものだとも言える。ジリアンの目の前に魔神が現れたことは、魔神のいる世界、つまり物語世界の中にジリアンが入り込んだのだ。子供の頃には簡単に物語世界に入り込むことができるが、大人のジリアンにもできた。時として大人も子供の頃のように、夢や物語の中でのように、魔神に会える。魔神は信じさえすればそこにいる。信じなければいけない。『ナイチンゲール目瓶の中の魔神』は物語を信じる力の回復を大人に強く訴えかける。

御伽話では魔神への願いは三つと決まっている。すでに述べたように3はマジック・ナンバーであり、魔神自身も「力を持つ数字だ」(196)と言い、魔神とジリアンを繋ぐ。三つの願いを叶えないうちは、魔神は彼を瓶から解放した者の奴隷であり自由には動けない。魔神は今まで三回瓶の中に封じ込められたが、その間彼は動くことができなかった。この動くことができない状態は死の影を見て三回動けなくなるジリアンと重なる。瓶から解放され活動する魔神は、麻痺状態が解け動き出すジリアンに重なる。ジリアンと魔神は三回の抑圧と解放のパターンを共有する。3という数字が二人を繋いでいる。

魔神は、ジリアンが三つの願いを無駄なものにしないようにとじっくり考えている間に、たくさん話をしてくれる。今まで瓶の中にいたのは三回で、封じ込められた経緯や瓶の外にいた時には様々な愛と冒険を経験したことなど。二人はまるで恋人同士のように互いの物語を聞かせ合う(250)。二人は愛し合うからまさに恋人同士だ。魔神はジリアンの三つの願いのひとつ「私を愛して」の言葉により彼女を愛し、ジリアンはもうひとつの願いとして「魔神の好きなことをして」と言うほどに彼を愛した。魔神がシバの女王とのエピソードを始めとする『アラビアンナイト』さながらの興味深い物語を話し終え、今度はジリアンに話をするように促した時「わたしは教師。大学の。結婚したけど今は自由の身。飛行機に乗って

世界を旅して物語を語ることについて話をする」と話し出すと、そんな話ではないとばかりに魔神は「君の物語を話してくれ」(231)と言う。この時、自分には語るに値する物語が全くないことに気づき、ジリアンは愕然とする。

一種のパニックがベホールト博士を襲った。探るような目をして限りないほどの知性を持つこの熱い人物の興味をひくような物語を全く、ひとつも持っていないように彼女には思われたのだ。(231)

魔神は大きな手を彼女の肩において「なんでもいいから話してごらん」(232)と再び促すので、彼女はぼつぼつとこれまでの心の旅の物語を語り始める。魔神が「君の物語」と言う時、それは今までの出来事とどう折り合いをつけ、どこに自分の居場所を見出して来たかという心の旅の物語のことなのだ。「生まれつき一人でいるのが好き」(232)だったから女子ばかりの寄宿学校で無知な女子の集団にいつも囲まれ隠れる場所もなくとても嫌だったこと。この女子校の寮にいた時、初めて想像上の男子、他者についての秘密の本を書いたけれどどうまくいかず暖炉で燃やしてしまったこと。若い頃いつもタッドジオ (Tadzio) という名前の肉体を持たない心の友が横にいて詩を作ったり何でも一緒にして過ごし、彼がたかさんの話をしてくれたこと。そこから生まれた彼女の詩の中の金褐色の少年といくつもの名前が彼女を虜にして魂を盗んでしまったこと。プライドメイドを務めた友人の父親からセクシュアルハラスメントを受けたこと。結婚したが夫が若い女性のもとに走り離婚したこと。それら心の奥底に澱のように溜まった普段は忘れてしまっているようなこと、忘れてしまいたいようなことを彼女は話すことで、魔神との新たな物語を手に入れる。ジリアンが学生の頃に書いた詩の中の「言葉による虚構」(‘romance of language’) (236)

である少年「——エフェソスの女神達が自分よりももっと実在しているのと同じように——現実——よりももっと実在した少年」(236)は「金褐色の少年」(‘gold dark boy’) (235)で、魔神は「金褐色の男」(‘gold-dark man’) (277)なのだ。彼女が学生の頃書いた詩の中の少年が成長し魔神となり、大人のジリアンの前に現れた。詩の中の少年の話聞いた魔神は「そして僕はここにいるよ」と言い、彼女は「本当に、議論の余地もなくね」と答える(236)。若い頃心の友だった虚構の少年も魔神もたくさん話をしてくれた。そして、魔神は物語の力を確信させ、物語の永遠性を信じる力を与え、彼がいつかまた戻ってきて愛してくれるという希望の物語まで残してくれた。‘Love in Fairytales’と題した記事の中でバイアットは「御伽話の中では何の疑問も持たず別の世界の存在を信じる」(Byatt, *Guardian* 2009 Dec)ことを指摘する。この物語は大人のための御伽話であると同時に、非日常を日常的なものとして描くマジックリアリズム作品の一種だとも言える。バイアットは、マジックリアリズム作家とされるアンジェラ・カーターやサルマン・ラシュディらとともに御伽話への興味を共有することはすでに述べた。バイアットを‘Critical Storytelling’の作家だとするアレクサ・アルファ(Alexa Alfer)らは、この作品について「西洋と東洋の衝突であるとともにリアリズムとファンタジー、物語論と物語を語る喜びの混沌としてはいるが実り多い出会いだ」(Alfer and Edwards de Campos 109)と述べている。ジリアンは別の世界から来た魔神に出会い、その存在を信じる。そして物語は次のように締めくくられる。

ペホールト博士は金褐色の男と一緒に、蛇と花の二つのペーパーウェイトを持ってマディソン通りへと歩いて行った。この地上には、人間の手で作られたものと人間の手で作られたのではない存在がいて、その存在は私達人間とは違った生を生き、私達より長く生き、物語の中

や夢の中、そして私達が余分な存在として豊かに漂うような時に、私達の人生を横切る。そしてジリアン・ベホルトは幸せだった。というのも彼女は子供だった頃のように、彼らの世界に戻ったから、もしくは少なくとも接近したから。彼女は魔神に言った、

「このまま居る？」

すると彼は言った、「いや。でもたぶんまた帰ってくるよ。」

「もしあなたが私の生きているうちに帰ってくるのを忘れなければね。」と彼女は言い、

「もしも忘れなければね」と魔神は言った。(277) (下線は筆者による)

死への不安に苛まれていたジリアンの姿はここにはない。「もしあなたが私の生きているうちに帰ってくるのを忘れなければね」という彼女の言葉は、自分がやがて死ぬべき存在であることを受け入れたことをはっきり示している。永遠の存在である魔神に出会い、別の世界の存在を信じる事ができたことで、彼女にはこの世界の人間の運命を受け入れる覚悟ができた。彼女にこのような精神的強さを与え、心身を満たしてくれたのは、この世界においては「余分な存在」の魔神なのだ。

## VI

ジリアンは、魔神に出会う前から時折「余分な存在として漂う」(floating redundant)という言葉をお守りの呪文のように誦えていた(97)。しかし、ジリアン自身が説明するように、現代においては'redundant'という言葉は、'superfluous'(余計な)'unwanted'(要らない)'unnecessary'(不必要な)'let go'(解雇する)など否定的な意味で使われる。雇い主は、解雇する時、まるで従業員が捕らえられた妖精でもあるかのように、自由を与えるから何処へでも好きなところに行くようにと言う。ジリアンは、職を解雇さ

れはしないものの、自分が女性であることと年齢的なものから自身を「余分な存在として漂う」人間だと意識する(100-101)。夫は彼女をさんざん振り回したあげく家を出て若い女性のもとへ去った。子供達は独立し遠く外国に住み自身の生活に忙しく彼女にはほとんど連絡もない。彼女は、女、妻、母の役割のなくなった自分をこの世に意味もなく頼りなく漂う余分な存在だと強く感じる(101-102)。夫が出て行った直後には「自分の人生という空間の中で自身が大きく広がるのを感じ」(104)解放感に浸ったが、それも一時的なものだった。彼女は、時折見える死の影に、体が麻痺してしまうほどの恐怖を感じる。その寒々しく虚ろな死の姿は、『カンタベリー物語』の忍耐強いグリゼルダの姿でもあった。グリゼルダは、内なるエネルギーを抑圧され人生の大部分を無駄にし、それに対する怒りさえも自らの意志で忘れざるを得なかった女性だ。学会講演で取り上げるほどグリゼルダの物語に強いこだわりを見せるジリアンもまた、グリゼルダのように内なるエネルギーを押さえつけられ、そのことに対する怒りをかかえていたことは想像に難くない。ジリアンは、夫や子供達が彼女のもとを去るまで、妻や母親としての役割を果たすためにエネルギーを吸い取られ、消耗し、怒り狂いそうになったことがあったに違いない。しかし、役割がなくなった今、残されたのは虚しく空っぽの「余分な存在として漂う」死を待つだけの年老いた姿。時折見える死の影に怯える老女。

しかし、ジリアンは、現代では否定的な意味で使われる言葉「余分な存在として漂う」の両義性を知っている。そして、肯定的な意味を強く意識しながら折に触れて「お守りの呪文のように」(97)その言葉を誦えるのだ。

例えば学会のためにアンカラに向かう飛行機の中で、ジリアンは「余分な存在として漂う」と呪文のように何度もつぶやく(97)。つぶやきながら彼女の脳裏には、雲ひとつない真っ青な空に「余分な存在として漂ってい

る」飛行機、ひいてはその飛行機に乗ってあぶくのようにぽっかりと空に浮かんでいる自分の姿がイメージされる。そして、このイメージは彼女を愉快で満たされた気分にする。ファーストクラスでひとりゆったりとくつろぐ彼女は至福を味わう。

変わることなく輝く太陽に触れられ、影はバラ色と青、そして白くさざめき、キラキラ煌めく天空が彼女のまわり一面に広がる中、彼女はシャンパンをすすり、塩を振ったアーモンドをつまみながら、「余分な存在として漂う」と独り言を言った。「余分な存在として漂う」と彼女は喜びに満ちてつぶやいた……私は猛烈な力の真っ只中にいる。私は今どんな女性よりも私の祖先の誰が夢見たよりも太陽に近いところにおいて、太陽の方向を見、余分な存在として漂いながら、ここにしっかりととどまっていることができる。(98) (下線は筆者による)

「余分な存在として漂う」という言葉とともに、彼女の想像はどんどん膨らみ飛翔する。飛行機に乗り大空に余分な存在として漂うジリアンは「私は今どんな女性よりも私の祖先の誰が夢見たよりも太陽に近いところにいる」(98)と感じる。彼女は時空を超え、祖先から続く命を受け継ぐ者として太古の昔から連なる時間軸の上に浮かぶと同時に、彼方に広がる宇宙の太陽系の空間を漂う。呪文を誦えながら重力に逆らって大空を飛ぶ彼女は、女性であることや年齢からくる不安や恐怖の重圧をものともせず、にこの世の中を自由自在に飛び回る魔女のようでもある。

[彼女は] 今までに先例のない存在であり、陶材の歯、レーシック手術を受けた視力、自分自身のお金の蓄え、自分自身の人生そして実力を発揮できる学問分野を持った女性で、飛行機で移動し、世界中の贅

沢なシートで眠り、余分な存在として漂いながら日中は太陽の下の白い広がりを見、夜は輝き回転する星々を見める。(105) (下線は筆者による)

飛行機で遠い国々の学会に行くジリアンには物語論研究者としての確かな居場所があり、それを十分に活かせるのは様々な役割を終えて「余分な存在として漂う」自由を手に入れたからだ。夫からも子供からも必要とされなくなり「彼女は今や、恋人でも妻でも母でもないのです、女性としては余分な存在だが、決して物語論学者としては余分な存在ではなく、それどころか様々な所で引っ張りだこなのだ」(103)。女性ではなく人間としての自分を考える時、ジリアンは昔学校で習った「余分な存在として漂う」の肯定的な意味を改めて思うのだ。

初めてジリアンが‘Floated redundant’ (100) という言葉に出会ったのは、ミルトン (John Milton) の『失樂園』 (*Paradise Lost*) を読んだ十六歳の時だった。イヴをそそのかす蛇を描写するミルトンの言葉が「初めてとぐろを巻いて形となり、本のページから美しく立ち現れ、イヴのように疑いを知らぬ彼女を打ちのめしたその日」(99) をジリアンはよく覚えているという。蛇の原始の渦のようなとぐろ巻きの美しさ (98-99) は、大きなエネルギーを帯び、ジリアンを一瞬にして虜にした。そして、彼女はこの時、‘floating redundant’ という言葉が、絶頂期にあったミルトンが二つの言語を魔法のように融合させ創り出した言葉のひとつで、‘floating’ は「洪水」に関係するゲルマン系の言葉、‘redundant’ は「溢れる」ものに関連するラテン語由来の言葉で (100)、語源的には「豊かな水が溢れる」というエネルギーに満ち生命力溢れる言葉だと教わる。楽園に現れた蛇を描写するミルトンの一節は、ジリアンによって紹介される。

ただし、後日見られるにいたったように  
地面を腹這って波のようにうねって  
進むのではなく、尾部を、つまり  
あたかも揺れ動く迷路といった  
格好で幾重にもとぐろを巻いて  
そそりたつまるいその下部を、  
地面につけて立ったまま、進んでいった。  
頭は高くもち上げられ、眼は紅玉  
のように煌めいていた、緑がかった  
金色に輝くその首は幾重にも巻かれた  
とぐろの真中に直立し、そのとぐろは  
草の上に豊かに波うっていた。その姿は  
見事で愛すべきものであった。(99-100) (平井訳 394-395) (下線は筆者  
による)

楽園の緑の草地の上に、紅玉色に煌めく目を持つ緑金色に輝く渦巻き状の生き物が「豊かに波うっていた」(‘Floated redundant’)というのだ。緑の楽園で「余分な存在として漂う」魅惑的な蛇が「豊かに波うつ」その姿の見事さにたちまち魅了されたジリアンは、ミルトンのこの魔法のような言葉から‘floating redundant’をお守りの呪文とした。

「余分な存在として漂う」者の力については、オーハンの学会講演『アラビアンナイト』の中の「カマルザマンの話」(‘The Story of Camaralzaman’, ‘The Tale of Kamar Al-Zaman’) (Burton 217-279)でも取り上げられる。ともに異性に対する強い嫌悪感から結婚することを拒み、別々の場所に幽閉された美しいカマルザマン王子とブドア王女を見た男女の魔神が王子と王女のどちらがより美しいかを決めるため、眠っている二人を同じ場所に運び

見較べたが決められず、六本角で三又尾の奇怪な姿の第三の地上精霊を呼ぶ。すると彼は、代わる代わる二人を目覚めさせて相手により大きな熱情や情欲を起こさせた方が勝ちだと言って枕元で勝利の踊りを踊る。そして代わる代わる目覚めた二人は互いに眠る相手を見て夢かと思ひ気絶するが、たちまち相思相愛となりその後紆余曲折を経て結婚。オーハンは、ストーリーの上で余分な存在である奇怪な姿の精霊の役割について次のように述べる。

カマラルザマンとブドアは——ここでは彼らもまたワルテル侯爵のように——自分の自由と意志を保持しようとし、異性を醜く嫌悪すべき重苦しいものとして拒絶していたが——ここ、夢の深淵で、この目に見えない奇妙な三人による喜劇と感傷的行動の間で導かれた彼らの運命に従う——そして物語を語るという視点から見て三人のうち最も余分なもの、最も大きく、最も目立ち、最も記憶に残るものは、美しく完璧な姿の眠る二人の周りを歓喜して跳ね回る、角が生え三又尾のぞっとするほど不均衡な体格のがっしりした土の巨人なのだ。(134) (下線は筆者による)

王子と王女は、目に見えない魔神達の勝手な思惑によって出会い「起こるべきことが起こる」(133)が、オーハンが言うように物語を語る上で最も余分なものが大きな役割を果たす。パイアットはこの御伽話集に付した謝辞の中で、この三人目の魔神の奇妙さに初めて注意を向けてくれたアブドゥラザク・グルナ (Abdulrazak Gurnah) に謝意を表しており、喜ばしき余分な存在 ('delightful redundancy') (137) を描くヒントとしたことがわかる。

「余分な存在として漂い」「豊かに揺れる」ミルトンの蛇は、類似点の多

さから魔神でもあると考えられる。

ミルトンの蛇は、ジリアンを魅了し ('struck, lovely') (99), 緑がかった金色 ('verdant gold') (99), うろこに覆われ, とぐろを巻いて ('coils, maze, circling spires') (99), 余分に漂い豊かに揺れ ('floated redundant'), エネルギーに満ち ('primordial, surging') (99), 書かれた言葉から目に見える形で現れた ('made of words and visible to the eye') (100)。

他方, 魔神も, 彼女の魔神への二つ目三つ目の願いからわかるように, 愛し愛されたいと思うほどジリアンを魅了し, 緑がかった金色 ('olive-coloured, laced with gold') (191) ('a green-gold tube') (192), うろこではないが鎖帷子をつけたような蛇のような肌 ('like snakeskin, not scaly but somehow mailed') (191), 蛇のように巻いた姿 ('curled round on himself like a snake') (192) で, この世界では余分な存在だが, 熱いエネルギーに満ちている。

さらに, ジリアンもミルトンの蛇になる瞬間がある。ホテルのプールでひとり泳ぐ彼女は「純粋なエネルギーとなり, 泳ぐ蛇のようにさざ波をたてて前進する」(170)。そのプールは, ミルトンの蛇と同じ緑色 (tiled in emerald green, green tiles, green rolls of swaying liquid) (169) と金色 (gold-rimmed lamps, gold mosaic, the golden light) (169) に溢れ, 「揺れる金色の光の網目が織り込まれた緑また緑の中, 目を見開きながら, 優しいささやきと跳ねる水音を耳に」(170) 彼女はミルトンの蛇のように泳ぐのだ。すると, 「神経の結び目が解かれ, 心臓と肺は安定しそのポンプの動きが整えられ, 体が生き生きとした喜びに満たされる」(170)。「余分な存在として漂う」('floating redundant') という言葉をお守りの呪文として誦えるジリアンは, プールで泳ぐ時, ミルトンの蛇になる。

ミルトンの蛇, 魔神, ジリアンは「余分な存在として豊かに揺れ漂う」点で重なる。また, 魔神はジリアン ('Gillian') のことをジルヤン ('Djil-yan') と発音する (269) が, 'Djil-yan' は 'djinniyah, female djinn' (130) に似る。

魔神は人間のジリアンに女魔神のような親しみを感じていたことが示唆される。ジリアンは、余分な存在として漂い豊かに揺れる楽園の蛇の様子を描写するミルトンの言葉「余分な存在として漂う」を呪文のように誦え、余分な存在として運命のままに漂っていたので、この世界にとっては余分な存在の魔神に出会え、三つの願いを叶えてもらい永遠に繋がる豊穡の物語を手に入れることができた。魔神はジリアンの三つ目の願いによって炎の世界に去る時には、様々な形と色の粒の入った「元素のダンス」というペーパーウェイトをくれた。これは、世界には様々なものが存在していることを象徴する。そして、ジリアンが魔神と歩く最後の場面で手に持っている蛇と花のペーパーウェイトはそれぞれ、蛇＝魔神＝ミルトンの蛇＝余分な存在として漂う者、花＝再生を表徴している。どのペーパーウェイトを買おうか迷っていたジリアンに、魔神がこれらを選んでくれたことは重要だ。魔神のおかげで彼女は世界には色々なものが存在することを実感し「余分な存在として漂う」者の大きな力と再生への希望を手にすることができた。「余分な存在として漂う」ことの肯定的な意味がこの短編には強く謳われている。

## VII

『千夜一夜物語』に刺激を受けたこの御伽話集は、物語と人間の生と死の関係を描く。

『ガラスの棺』では、仕立て屋が、運命に逆らわないことで悪い魔法使いから救い出したお姫様と結婚し、お姫様の弟との三人暮らしの中で余分な存在として布作品を好きなだけ作って暮らすことで、豊穡に繋がる。『ゴドの話』では、水夫と粉屋の娘の物語の最後に、夫の水夫に死なれた後の鍛冶屋の娘の消息——肉屋と再婚し元気な子供を六人産んだ——が付け足しのように語られるが、彼女に豊穡のイメージが与えられている。

『長女のお姫様』では、空を青にもどすというミッションに失敗した長女のお姫様は王国にとっては余分な存在となったが、物語を語り語らせることで傷を癒す森の老婆と暮らすことに決め、緑の空は緑のまま美しいと思える豊かな心を手に入れた。『竜の息』では、余計な存在の巨大竜が村を壊滅させた物語が村人に語り伝えられ、平凡な日常の中にある真の豊穡を教える。『ナイチンゲールの目瓶の中の魔神』では、「余分な存在として漂う」主人公が、その肯定的な意味を強く意識することで、この世界では「余分な存在である」魔神に出会い三つの願いを叶えてもらううちに、人間の宿命である死への覚悟と永遠に連なる豊穡の物語を手に入れる。

余分な存在として運命に任せて漂う時、死すべき人間も永遠に繋がる豊穡の物語を手にすることができるというのがこの短編集を貫くテーマだと結論づけることができる。

## 注

- 1) *The Djinn in the Nightingale's Eye : Five Fairy Stories*からの引用にはA. S. Byatt, *The Djinn in the Nightingale's Eye : Five Fairy Stories* (London: Vintage, 1995). の頁数を示し、原則として日本語訳のみを記した。日本語訳はすべて拙訳による。ただし、ミルトン『失楽園』からの引用部分は、平井正穂訳(筑摩書房、1979年)394-395による。
- 2) 3はマジック・ナンバー。マジック・ナンバーについては松岡和子訳『シェイクスピア全集3 マクベス』の三人の魔女についての脚注1(p.16)参照。魔法や呪いの言葉は三度繰り返されるなど3は不思議な力を持つ数字だとされる。『アラビアンナイト』のシェヘラザードが千夜一夜の間に産んだ子供は三人。『ガラスの棺』の仕立て屋は森の老人からお礼を三つの中から選ぶように言われ、最後はお城で三人で暮らす。『ゴドの話』の鍛冶屋の娘は3の倍数の六人の子供を生んで豊穡に繋がる。『長女のお姫様の物語』の姫は三人姉妹で、森の奥へのお伴は三匹。『竜の息』の主人公は三人兄妹、竜は3の倍数の六つの頭を持つ。『ナイチンゲールの目瓶の中の魔神』の魔神への願いは三つ。魔神が瓶に閉じ込められたのは三回。ジリアンが死の影に怯え体が麻痺したのが三回。魔神からもらったペーパーウ

エイトは計三個。ジリアンの取り上げた『忍耐強いグリゼルダ』ではグリゼルダが侯爵から無理難題を課せられたのは三回。ハグヒア・ソフィアの柱の穴に手を入れ三回まわすよう促したのは三人の女。トルコの貧しい漁師の物語で願いを叶える猿は三匹等。

#### 引用文献

- 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館, 1967年。
- 松岡和子訳『シェイクスピア全集 3 マクベス』筑摩書房, 1996年。
- ミルトン, ジョン『失樂園』平井正穂訳 筑摩書房, 1979年。
- Alfer, Alexa and Army Edwards de Campos. *A. S. Byatt: Critical Storytelling. Contemporary British Novelists* (Manchester: Manchester University Press, 2010).
- Burton, Sir Richard F. *The Arabian Nights: Tales from a Thousand and One Nights*. (New York: Modern Library, 2001).
- Byatt, A. S.. *The Djinn in the Nightingale's Eye: Five Fairy Stories*. (London: Vintage, 1995).
- , *Possession: A Romance*. (London: Vintage, 1991).
- , Introduction of *The Arabian Nights: Tales from a Thousand and One Nights*. (New York: Modern Library, 2001).
- , “Narrate or Die : Why Scheherazade Keeps on Talking”. *The New York Times Magazine*, 18 Apr. 1999.
- , *On Histories and Stories: Selected Essays*. (London: Chatto & Windus, 2000, London: Vintage, 2001).
- , “Writing in Terms of Pleasure.” Interview by San Leith *Guardian* 25 Apr. 2009. Web. 1 Dec. 2011. <<http://www.guardian.co.uk/books/2009/apr/25/as-byatt-interview/print>>
- , “Love in Fairytales.” *Guardian* 12 Dec. 2009. Web. 1 Dec. 2011. <<http://www.guardian.co.uk/books/2009/oct/12/fairytales-byatt-abstract-love/print>>
- Byatt, A. S. and Sodre, Igenes, *Imagining Characters*. (London: Vintage, 1995).
- Campbell, Jane. “Forever Possibilities and Impossibilities, Of Course”: Women and Narrative in *The Djinn in the Nightingale's Eye* in Alexa Alfer and Michael J. Noble (eds), *Essays on the Fiction of A. S. Byatt: Imagining the Real* (Connecticut: Greenwood, 2001).
- Maack, Annegret. “Wonder-Tales Hiding a Truth: Retelling Tales in “The Djinn in the Nightingale's Eye””, in Alexa Alfer and Michael J. Noble (eds), *Essays on*

余分な存在として漂う

*the Fiction of A. S. Byatt: Imagining the Real* (Connecticut: Greenwood, 2001).  
Todd, Richard. *A. S. Byatt*, (Plymouth: Northcote House, 1997).